

第3部

青森県の青少年の現状と今後

－「青少年の意識に関する調査」（令和4年度）の分析から－

青森県の青少年の現状と今後

- 「青少年の意識に関する調査（令和4年度）の分析から」 -

弘前大学教育学部 教授 田名場 忍

令和4年度、青少年を取りまく状況は、いくつかの点で、昨年度にも増して厳しくなっているように思います。

その背景の一つとして、新型コロナウイルス感染症のさまざまな対応が続けられ、今年度で3年経過しようとしている状況があります。現在も、ウイルス感染の心配をしながら、一定の対人距離などに配慮し、ワクチン接種も続けられ、マスクを付けてのやり取りも続いています。新型コロナウイルス感染症はさまざまな領域に影響をもたらしました。医療や介護の現場はもとより、観光や飲食、教育など、人と人との交流が前提となる場への影響は大きなものがありました。新型コロナウイルス感染症の青少年への影響を考えると、その一つに、マスクで表情がわかりにくく、他者とのある程度の距離を求められる現状で、非言語的コミュニケーションが伝わりにくいことがあろうと思います。その分、聞き手が言葉の内容に一層の注意を向けることで、言語的コミュニケーションの影響が増しているのかもしれませんが。この状況は、短文のやりとりが繰り返されるSNSなどインターネット上のコミュニケーションに似ているようにも思います。このような状況下で、青少年は、表情など非言語的コミュニケーションでメッセージがやわらげられないまま、直接的で辛辣な言語内容にびっくりしたり、傷ついたりしているのかもしれませんが。また、言語的コミュニケーション優勢のコミュニケーション環境で、自身の伝えたいことがうまく伝えられない、もどかしさやいらだちをつのらせているのかもしれませんが。さらに、青少年自身も、こうした不安定な感情状態から、心にもない言葉を発しているのかもしれませんが。この他に、マスクで自分自身が認識されにくくなっていると青少年が感じるとき、匿名性の高い状態になっているのかもしれませんが。匿名性の高い状態では、一般に他者への攻撃的な言動が増すという研究もあります。このような状況下での青少年の心理的課題やその対応・対策については、令和2年度の青少年の意識に関する調査分析や昨年度の「青森県子ども・若者白書」のコラムで記しておりますので、ご参照いただければと存じます。

青少年を取りまく状況を厳しくさせている背景として、その他にも、いくつか気になることがありました。その一つとしては、昨年春からのロシアによるウクライナ侵攻とそれを契機としたウクライナ各地での戦いです。目を覆いたくなるニュースが毎日のように繰り返されてきました。大人である我々もいたたまれない気持ちややりきれない気持ちになりますが、多感な青少年の目にはどのように映り、どのようなことを考える契機になっているのでしょうか。また、ウクライナでの戦いに世界各国が影響を受け、緊張が高まっているようにも思えます。「周囲の人たちの気持ちを思いやり、周囲の人たちをいたわりながら、行動しましょう」とか「攻撃的な行動をとる前に、それ以外の行動を選択する可能性も考えましょう」など、日常、青少年が大人から教えられていることが、こうした世界的な緊張状態の中で、どのように伝わっているのでしょうか。

さらに、ウクライナでの戦いや世界的な緊張状態が長期化していることで、エネルギー資源や農

産物などの安定的流通が滞るようになってきました。新型コロナウイルス感染症対策下で痛んできた日本経済ですが、さらに追い打ちをかけるようにして、最近は物価の上昇が続いています。ガソリンやガス、電気など、生活に必要なエネルギー料金が急速に高くなってきました。食料品なども、そのほとんどが値上がりをしています。こうした経済状況の中、各家庭では、節約や工夫を続けているのだと思います。子どもたちに食べさせたい料理を食べさせてあげられない親の気持ちはどのようなものでしょうか。冬の寒さの中、小さなストーブの心細い暖を年下の弟妹に譲る兄姉の思いはどのようなものでしょうか。

こうした最近の青少年を取りまく状況は、現在を生きる青少年にどのような影響を与えているのでしょうか。もちろん、青少年といっても、年齢も幅広く、個々人の特徴も異なり、家庭環境等環境も同じではないので、一括りで論じることは難しく、危険もあろうと思います。また、こうした青少年を取りまく状況は、ゆるやかに時間をかけて影響が出てくるものもあろうと思います。本県では、小学校、中学校、高等学校の児童生徒に対して、二年おきに青少年の意識に関する調査を実施し、変化の特徴を地道に探ってきました。前回の令和2年度の調査は、従来の質問項目に新型コロナウイルス感染症に関する質問項目を新たに加えての調査でした。前々回の平成30年度の調査はSNS等インターネットを介したコミュニケーションに関する質問項目を吟味しての調査でした。令和4年度の今回の調査では、多少の改定はありましたが、おおむね前回・前々回の質問項目を踏襲した調査となっています。本稿では、最近の青少年を取りまく状況の影響に留意しながら、自尊心やコミュニケーション、新型コロナウイルス感染症の影響などといった点について、前回・前々回の調査結果と今回の調査結果を比較し、青少年の現状を考え、今後重要となる課題も探っていこうと思います。

1 青少年をとりまく環境1-地域への好意度とその理由-

平成30年度調査では、問2(1)住んでいる地域への好意の経年変化結果から、平成24年度から平成28年度にかけては「好き」という回答が50%を超えていたのに対し、46.3%と減少していることを取り上げ、本県への定着促進などといった課題とも関連し、懸念されることを記しました。さらに、地域への好意の理由を問2(2)理由とあわせてみたとき、青少年が住んでいる地域に好意を感じる要因として、地域の人々とのあたたかい交流を実感でき、犯罪や災害等の危険性が少ないと感じられ、自然豊かで平穏な環境が確保されることが重要であることを記しました。

これに対し、問2(1)住んでいる地域への好意について「好き」という回答が、令和2年度では55.3%、令和4年度では50.7%となりました。「どちらかといえば好き」も含めてみると、令和2年度では91.6%、令和4年度では91.5%と、高い割合の青少年が住んでいる地域に好意を感じているという結果になりました。「好き」「どちらかといえば好き」を合わせた割合は、平成28年度87.3%、平成30年度85.0%と減少傾向でしたが、この10年間の調査で最も高かった平成26年度の91.1%を、令和2年度と令和4年度で、若干ですが上回る結果となりました。さらに、地域への好意の理由について問2(2)をみると、令和4年度も「住んでいる人が親切・優しいから」、「自然が豊かだから」という選択肢の選択率が全体で50%を超え、

例年同様に高い傾向を示しました。しかし、問2(2)の経年変化から、令和2年度と令和4年度では、「食べ物おいしいから」や「伝統的な祭りや伝統芸能があるから」などという選択割合が4割を超え、増加しています。自然豊かで平穏な環境は依然として重要視されながらも、その他の多様な魅力にも目を向けられるようになってきている可能性が示唆されます。

新型コロナウイルス感染症対応の中、最近は県外などへの旅行もしやすくなってきているとはいえ、多くの方々にとって、住居地以外の場所に出かけにくい状況が長く続いてきたといえます。また、問4地域活動の参加について、「参加したことがない」という回答が平成30年度までは30%を下回っているのに対し、令和2年度以降は40%弱になっていることからわかるように、地域内のさまざまな活動機会が少なくなり、地域活動への参加が控えられてきました。こうした状況下で、逆に、日常生活の基盤となる場所、身近な場所の良さがじっくりと見直されている可能性も今回の調査結果から考えることができます。その一方で、そうした状況が身内びいきを促進させている結果である可能性もあり、注意が必要です。この検討については、これ以上は控え、次回の調査結果を待ち、再度考えたいと思います。

2 青少年をとりまく環境2-学校生活・家庭生活、そして友人関係-

平成30年度調査でも書きましたが、多くの小中高校生にとって最も重要で身近な環境は、個人差はあるにしても学校と家庭、そして友人関係とされます。対人関係の発達の一般的傾向としては、小学生では家庭を主軸とした幼少期から徐々に学校や友人関係に主軸を移していく時期であり、中高校生になるとさらに学校や友人関係に主軸を移しながらも家庭も重要な影響力をもつ時期とされています。ここでは、調査結果を学校生活・家庭生活・友人関係の順で経年比較も加えながら考えてみます。

まず、問6(1)学校生活の満足度の経年変化では、「楽しい」「どちらかといえば楽しい」という回答が、平成30年度が87.2%であるのに対し、令和2年度と令和4年度では89.1%、91.8%と増加しています。その割合を押し上げているのは、学校種別経年変化から中学生、高校生の回答でした。平成30年度では上級学校に進むにしたがって減少する傾向がありましたが、令和2年度と令和4年度でそれが認められなかったということになります。問6(2)学校生活が楽しい理由の経年変化から、平成30年度に比較して令和2年度と令和4年度の全体的な選択の割合が高くなっていることが、ひとつの特徴と考えられます。特に、対人関係の影響が大きいと考えられる「部活動」、「友だち」、「先生」、「学校行事」、「体育館や校庭での遊び」で割合が増加しており、その他「係を任せてもらっている」でも増加していました。新型コロナウイルス感染症対応の影響も心配されましたが、予想に反する結果となりました。最近の大変な状況であるからこそ、対人関係上のあたたかい交流、あるいは役割を果たすことで周囲の人たちによるこぼれる体験などが増えるように、学校の先生方が配慮して下さった結果であろうことが考えられます。また、そうしたことを基盤として、青少年の皆さんがお互いを支え合う交流をしている結果であろうとも考えられます。こうした結果が、一時的なものでなく、この機会を経て継続的なものになるよう願いつつ、見守りたいと思います。

次に、家庭生活について、問7(1)家族・家庭が安心できる存在・場所かどうかでみると、

「安心できる」「まあまあ安心できる」をあわせた割合が、小学生 98.5%、中学生 97.1%、高校生 97.5%と、学校種別に関わらず高い値を示していました。経年変化を見ても、令和2年度、さらに令和4年度で高い値となっています。しかし、各校種で家庭生活で安心感を得られない青少年が2%前後いることについて、深刻で緊急性のある問題につながる可能性があることを付記したいと思います。問7(7)家族・家庭に大切なものについては、「安心できる存在・場所」という選択肢を選んだ割合が、学校種別に、小学生 43.3%、中学生 44.2%、高校生 55.9%と上級学校に進むにしたがって高くなっていることが、例年同様に特徴です。自由記述をみると、高校生の「過度に干渉しないこと」「金」などとは対照的に、小中学生で「絶対になにがあっても味方」「お互いを大切に思えること」といった回答があることから考えると、小中学生では強い精神的な支えを、高校生では適度な距離を望みつつも精神的・物質的両面での支えを、家族・家庭に希求した結果かもしれません。小学生の自由記述で「暴力をふるわない」という回答があったことを、家族のストレスが高まる状況での心配として、付記したいと思います。

最後に、友人関係について、悩みごとの相談相手をたずねた質問16から考えます。まず、いろいろなことを相談する相手を一人選んでもらった質問16(1)の回答では、お母さんという回答と友だちという回答が多く、それぞれ全体で35.4%、33.6%となっています。これを学校種別回答でみると、小学生でお母さんへの相談(40.9%)が友だちへの相談(25.6%)よりも多いのに対し、中高生ではお母さんへの相談よりも友だちへの相談がやや多くなっています(お母さんへの相談と友だちへの相談が、中学生で30.5%と34.8%、高校生で34.5%と40.7%)。この結果は例年の結果とほぼ同様で、中学生以上になると、家族から友人へと精神的な支えが移行してくることがうかがえます。また、「誰にも相談しない」という回答については、経年変化の図から平成30年度が19.4%であるのに対し、令和2年度と令和4年度では17.6%、13.5%と減少しています。質問16(2)から「誰にも相談しない」場合の理由をみると、現状の悩みが相談するほどではない場合(全体で28.7%)や相談せずとも自力解決できる場合(全体で32.2%)などが背景として多い一方で、相談できる他者がいない場合(全体で7.0%)や他者に知られたくない場合(全体で18.9%)なども少なくないことに注意が必要です。特に、学校種別でみたとき、高校生が相談できる他者がいない場合で11.1%、他者に知られたくない場合で30.6%と比較的高い割合になっています。さらに、悩みの相談相手が「インターネットを通じた知り合い」という回答が、少ないながらも存在し(全体で2.4%)、特に小学生で4.6%と多くなり、低年齢化が懸念されることについても書き留めたいと思います。平成30年度にも記しましたが、自分のことを正直に他者に伝えるという行為は、自分自身を見つめ直す機会、他者からのフィードバックで新たな自分自身の発見を得る機会、そして鬱屈とした気持ちをやわらげる機会になります。しかし、それは相談する他者が秘密を守り、誠実に対応をしてくれることが条件になります。つまり、信頼できる他者が必要であり、その信頼は日常の他者とのやりとりからゆっくりと育っていくことが多いということも書き添えたいと思います。

3 青少年の自尊心と他者への思いやり

自身の存在を肯定的に実感することは、自尊心、自己肯定感などと呼ばれ、学習活動や他者

とのやりとりへの意欲や持続性など、さまざまな側面に影響があることがわかってきています。また、自尊心は、自身を意識することによって生じ、多くの場合に身近な他者との比較によって吟味されていくものだとも言われています。さらに、自尊心には、自分が自身の長所短所も含めてありのままを肯定的に実感する側面と他者とのやりとりを通して他者に貢献できた経験などから自身の肯定的実感を得ていく側面とがあるとも言われています。青少年期は、まさに誰もが自分自身について懸命に考え、身近な他者とのやりとりや比較を通じて、悩み、ときに痛みも感じながら、これからの自分を模索していく時期といえます。ここでは、質問8などの回答結果を通して、青少年の自尊心、社会との関わり、悩みについて考えてみたいと思います。

まず、自尊心についての質問8(1)「あなたは自分のことが好きですか」という質問では、全体で「好き」という回答が23.1%、「どちらかといえば好き」という回答が44.3%、総計で肯定的な回答が67.4%でした。平成30年度(肯定的な回答が58.6%)、令和2年度(肯定的な回答が62.4%)と比較すると、少しずつですが増加しています。上級学校に進むにしたがって、そして女子で減少する傾向は例年通り認められるのですが、例年に比較して中学、高校生の自尊心が高い結果となっています。

また、質問12では世の中の役に立っていると感じるかという問いを通して社会との関わりを尋ねています。「そう思う」「ややそう思う」という回答は、学校種別に、小学生64.6%、中学生60.3%、高校生58.5%と減少しながらも、半数以上の割合を保っており、全体で61.2%でした。こうした役割を果たすなどによる社会への貢献の実感は、自分自身の存在の意味を考えさせることへと結びつき、自尊心を高めることにつながると考えられます。今回の結果から、中高校生に社会への貢献の実感につながる役割を割りふることができるか、そのためには適切な役割を作り出せるかが、家族や教師といった青少年に身近な大人達はもちろん、地域の大人や自治体に求められるのではないのでしょうか。

質問15 悩みの種類の回答結果とあわせて考えてみましょう。多肢選択方式での回答で、全体の選択割合が多いのは「勉強、成績のこと(51.7%)」「将来のこと(44.6%)」「進学のこと(37.7%)」でした。また、学校種別にみたとき、この3つの回答は、共通して、上級学校に進むにしたがって増えていること(例えば、「勉強、成績のこと」では、小学生34.5%、中学生60.3%、高校生61.0%)も例年と同様でした。一方、「悩みごとはない」という回答は小学生26.9%、中学生16.7%、高校生15.5%と減少しています。以上の結果から、上級学校に進むにしたがって、抱える悩みの種類も数も増えていることがわかります。こうした結果は、自尊心の低下とも関連していると考えられ、また先の相談できる他者の存在とあわせて検討する必要があります。悩みの種類や数も重要な点ではありますが、どのように悩んでいるのか、悩みを分かち合う信頼できる他者はいるのか、悩みの先に見つけていくものは何かに注意を払うことも重要であることを忘れずに青少年一人ひとりと向き合い続けていく必要があるでしょう。

4 青少年の新たな課題(情報機器とコミュニケーション、新型コロナウイルス感染症)

最後に青少年の新たな課題として、情報機器の進歩とコミュニケーション、そして新型コロナウイルス感染症について、質問17と質問18を中心に取り上げます。

質問18は、友だちとのコミュニケーションについて、いちばん気持ちが楽な方法について質問しています。回答をみると、学校種別によらず「直接会って話をする」が6割を超え、最も多くなっています。また、学校種別によらず「電話をする」は5%前後、「メールをする」は10%前後になりました。一方、「SNSを利用する」は小学生で11.3%、中学生で18.5%、高校生で22.3%と増加しています。直接会ったり、電話で話したりするよりも、情報量が少なく、即時性も低いメールやSNSが、気持ちが楽だと感じるのはなぜでしょうか。新型コロナウイルス感染症対応のために安全なコミュニケーションをしたいということもあろうかと思いますが、スマートフォン等最新の情報機器の普及が利用の後押しをしているのかもしれませんが、ある程度の心理的距離を保った、一定の情報量の制限のあるコミュニケーション方法を求めている結果ということも考えられます。この最後の点について、最近の心理学の研究で、若者の対人関係の持ち方の特徴として、近づきすぎず離れすぎない付き合い方が選択されるようになってきていることを指摘しているものもあります。その背景には、コミュニケーションを行うことで、自身自身が傷つくことを恐れると共に、相手を傷つけることも恐れることがあるからだとしています。また、こうした要因が複数、絡み合っただけの結果かもしれません。今回の調査結果のみから、メールやSNSが一定程度選択された理由について結論を出すことはできませんが、今後も注意して考えていく必要があろうと思います。

質問17は、令和2年度から調査項目として導入された新型コロナウイルス感染症に関するものです。令和2年度では「コロナで学校が休校中、あなたが困ったことなど、休校前と違っていたこと」として尋ねていましたが、今回は「最近の1か月のあなたにあてはまるもの」として尋ねていますので、単純な比較はできませんが、令和2年度の調査結果も参照しながら考えてみたいと思います。令和2年度では、「どれもあてまらない」という回答が最も多く、全体で51.0%でした。また、回答の多い選択肢をあげると、全体で「コロナのことを考えると嫌な気持ちになった」が26.0%（小学生37.0%、中学生20.8%、高校生19.2%）、「集中できなかった」が15.5%（小学生18.3%、中学生16.7%、高校生11.4%）で、小学生の影響の受けやすさが心配されました。今回は、「どれもあてまらない」が全体で37.4%、次いで、「集中できない」が全体で24.2%（小学生18.3%、中学生24.0%、高校生29.9%）、「コロナのことを考えると嫌な気持ちになる」が全体で20.0%（小学生27.2%、中学生18.7%、高校生13.4%）でした。「どれもあてまらない」が全体の4割弱と少なくなったこと、「集中できない」という回答が中高年生で多かったことなどから、年齢が高いほど誰にも相談できないままストレスをためていることも心配されます。悩みもがく青少年の良き相談相手に誰がなれているのかという点が青少年健全育成の重要な課題であることが、今回もさまざまな結果からみえてきているように思います。

今回の令和4年度調査から、新型コロナウイルス感染症対応や世界的な緊張状態、経済的悪化の直接的な影響と思われる顕著な結果はみられませんでした。しかし、こういった負荷は、ある一定のところまで顕在化せずに蓄積している可能性もあります。今後も注意してみたい必要があることを最後に指摘して、筆をおきたいと思います。